

カントと理性

karinomaki

理性批判

カントは理性の限界について書いています。本当に理性には限界があるのでしょうか。この文章では、理性が何かを突き抜けて、魔法をつくることについて書きたいです。

カントは魔法など信じなかったのでしょうか。しかし、カントには大きな夢があったと思うのです。それは、永遠に伸びる柱にのぼるという、途方もない夢です。

この世界には、現実で生きていくことが限りなく難しいという、苦しみの章があります。しかし、この苦しみを、「批判」によってつづそうとしていると、カントの哲学を解釈してみます。

好きな人

もし、この世界に好きな人がいるのなら・・・たとえこの世で結ばれない相手でも、運命の人であると信じたくなるでしょう。これが、魔法です。

好きな人がこの世界に生きていることが、魔法なのです。

カントは、おそらく、女神に恋していたのでしょう。だから、理性を批判して、女神に届く道がある意味で遮断したのでしょう。

この世界の魔法は、横にのびていく

この世界には、確かに魔法があります。しかし、それは、柱ではなかったのです。カントは女神（それは哲学の神かもしれません。）に恋をして、理性を上へ上へと伸ばそうとして、アンチノミーという、矛盾にぶつかったのです。

では、カントがこの世界の女性を愛していたら・・・。

そんなことはありません。

カントの哲学は、完璧な道徳を成立させることで、横のラインをつくり、楽園としているのです。

では、何故、「横」なのか。

（詳しくは「心で読むカント哲学」に書いてあります。）

縦に、苦しみながらのぼるよりも、横に乗る方が楽ですね。

簡単に言えば、楽園は、横、苦しみは縦です。

カントは、苦しみながら上へと、女神を目指して進もうとしたのです。

理性

理性とは、上へのびていこうとして、矛盾に陥る定めを持っています。だから、理性批判なのです。（カントは純粋理性批判という名著を残しています。）

しかし、この世界を愛するためには、やはり、この世界の人を愛さなければならないのです。私も、一生かけて愛する人を40才で見つけました。

横の楽園に乗ってしまうわけではない。しかし、のぼり続けるのが苦しくなれば、一息ついてもいいのです。愛とは、そういう安らぎなのです。

悟性

この世界の人を愛するという安らぎを持たなかったカントは、感性（認識の第一段階）と、理性（女神への道）の間に、悟性を置くしかなかった。悟性とは、一人で哲学をするための支えです。少なくとも、カントと私にとってはそうです。

悟性とは、「思考する」ことです。この真ん中の支えは、私が長い間その存在の大切さに気がつくことを失っていたものであり、「魔法」でもあります。

実は、自分一人の力で思考を繰り広げることが、理性の土台であり、魔法の湧水をつくっているのです。

思考をまとめること

この、悟性は、実は地獄の苦しみから最も助けられていく魔法なのです。

神へと向かう理性は、アンチノミーという矛盾にぶつかって神へは届かない。しかし、その、叩き落された壁のしたには、「思考する」という、悟性のネットがあるのです。

「考える」ということについて、考えてみて下さい。愛は、考えることができないものです。どうして愛しているのか、理屈はわかりません。

しかし、確かに人は「愛している」のです。

その愛が、悟性の中に入ろうとして、愛について考えようとしたとき、

この世界には魔法がかけられるのです。

縦から横へ

縦に、理性は向かう、しかし女神には届かない。叩きつけられて落ちたところに、「思考する」というネットがある。このネットは、この地上を美しくする、愛で満ちているのです。

もし、誰かを愛していたら・・・

その理屈を考えることはできないけれど、解きほぐされないその感情こそが、思考したいという気持ちとつながり、ネットを柔らかくし、神に届かない痛みから人を救うのです。

最後に、まだ若かったカントの著書、「天界の一般自然史と理論」から。

「晴れわたった夜、星しげき空をながめるとき、ひとは、ただ高貴な魂のみが感ずる一種の満足を与えられる。自然の一樣な静けさと耳目の安らいのなかに、不滅な精神の隠された認識能力は、言えざる言葉を語り、感受されはするが記述することのできない解きほぐされていない概念を与える。」

カントは、この世界よりも、永遠の世界を愛して、星空を見ていたのかもしれませんがね。だから、理性を批判するという壁にぶち当たり、苦しんだのでしょう。

しかし、カントの純粹理性批判は、彼が神に届こうと試みた、苦心の作であったはずです。